

《眼科臨床エキスパート》 所見から考えるぶどう膜炎

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集
園田康平, 後藤 浩 編

医学書に教科書型と参考書型があるとすれば、本書は教科書型といえる。ぶどう膜炎の専門的な詳しい知識を網羅したというより、「所見」に的を絞った本である。ぶどう膜炎を診るとき、まず、疾患の候補名がいくつか頭に浮かばなければならない。そのためには、ぶどう膜炎の全体を通して勉強しておく必要がある。「所見」をカギにして要領よくまとめられた本書は、通読も容易で全体をとらえる教科書として最適といえる。

総説は「ぶどう膜炎の診療概論」。肉芽腫性炎症と非肉芽性炎症の違いの説明はわかりやすい。少なくとも私が医局員の昔はこのような明快な解説はなかった。

総論では「診断に役立つ全身検査」「眼所見からみるぶどう膜炎の診断と鑑別」「いわゆる網膜色素上皮症について」などの内容がよくまとまっていてわかりやすい。例えば、ヘルペス性角膜裏面沈着物は「豚脂様だが厚みはなく、濃密かつ整然とした配列の KP」と記されている。

各論では、各疾患の「所見」の特徴が詳しく記述されている。例えば、ベーチェット病で「発作時に毛様充血や結膜充血は必発ではない」「デスメ膜の皺襞は比較的少ない」、Vogt-小柳-原田病で「初発では前眼部炎症は軽微である」「硝子体の所見は乏しい」など特徴的所見だけでなくネガティブな所見まで記述されている。

。こういう情報は外来の現場で診断を絞りこむのに大いに役立つはずだ。各論の最後に「強膜ぶどう膜炎」「視神経炎を伴うぶどう膜炎」が登場する。「所見」を中心に眼炎症を考えれば、外せない項目であろう。

本書は読みやすい。文章は一段組み、文字フォントは細めで落ち着いた印象だ。各項の内容は簡潔である。所見を中心に記述され、個々の治療法、文献的考察は省略されている。写真が多く、アトラスとして使える。外来に置いて目の前の患者さんの所見と見比べるのもいいだろう。

ぶどう膜炎の診療は、近年、着実に進歩している。PCR を使ってウイルスや細菌の存在を証明できるようになった。7 割くらいは診断がつくという。生物学的製剤によってベーチェット病の失明を救えるようになった。桐沢型ぶどう膜炎も治療法があり、初診医が見落としてはいけない最重要疾患となった。こうなってくるとステロイド点眼のワンパターンで対応していた一般眼科医もうかうかしてられない。もう一度、ぶどう膜炎を復習しなければならない。そう考えている諸氏に本書はお薦めである。

荻野眼科医院院長 荻野公嗣

B5 頁 308 2013 年

定価 15,750 円 (本体 15,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01738-1] 医学書院刊